

朝鮮石人像を訪ねて（1）

深田 晃二

人間や動物の形をした石像は祭祀目的や地域の守護神として、又死者を弔うものとして世界各地で見られる。中国の皇帝陵墓の副葬品としての兵馬俑やイースター島のモアイ像などは有名である。日本には石仏・地蔵さん・道祖神・羅漢・狛犬などがあり、韓国朝鮮には仏教石仏、石製のチャンスン、濟州島のトルハルバンなどがある。又、日本の各地には半島から渡ってきたと思われる石人像や石羊などが数多く見られる。これら朝鮮石造物は王陵や士大夫の陵墓の前の墓守として建てられたものだが、文字が刻印されていないのが殆どで、故郷を一度離れると由来の解らなくなるのが一般的である。日本全国の所在をまとめたものが無く、文献・ネット・口コミなどの情報を元にこれら石造物の所在を明らかにし、文人像・武人像・童子像・石羊などを訪ねて、それらにまつわる歴史をたどってみることにした。

★ 10万点の文化遺産 ★

米TIME誌は2002年にかなり長文のソウル発記事「失われた遺産(A Legacy Lost)」を載せた¹⁾。

朝鮮半島から持ち去られた文化財、特に日本に渡った文化財について詳しく述べている。その冒頭の部分を引用する。

『2001年7月の雨模様の夏の朝、ソウルの屋外彫刻博物館に65体の文人像、1体の武人像、4体の童子像の入った70個の木箱が運び込まれた。これらは数百年前に一度は王室の陵墓に守護像として立っていた花崗岩で造られ像である。しかし半世紀の間韓国では見る事はできなかつた。これらの殆どは1910~1945年の日本占領時代に韓半島から消えていた。館長の Brian Jang はのどを詰まらせながら「力ずくで連れ去られた先祖を迎えている様だ、どうどう取り戻した」と語った。

これを所有していたのは日本のビジネスマン日下守氏で「石人像は本来あるべき韓国に属すべきだとして返還を決めた。」という。日本は19世紀末から第2次世界大戦敗戦までの間に、植民地の役人及び民間収集家が朝鮮半島各地から少なくとも100,000の工芸品と文化遺産を集めめた。』

まずこの石人像の返還に至る経緯を見てみる。

★ 世中古石博物館 ★

70個の石人像が運び込まれた博物館は京畿道龍仁(ヨンイン)市陽智(ヤンジ)里にある「世中イエ

ットル(古石)博物館」で、2000年7月1日にオープンした。高速道を陽智ICで降りアシアナカントリークラブに行く途中にあり、約5000坪の敷地に王陵や士大夫(文武官)の墓地にあった文人石像と武人石像、それに石獣・望夫石(帰らざる夫を待ち続けてそのまま石になったと言われる)・チャンスン(“天下大將軍”“地下女將軍”とかかれた村の守護神)・ソッテ(鳥を竿や石柱の上に据えた村の信仰対象物)・ヨンジャバンア(牛馬に引かせて回す穀物を碾く臼)・石塔・石仏など、新羅時代から朝鮮時代までの石の彫刻1万点余りが展示されている。創設者の千信一氏は、これらの展示物を集め始めたきっかけは、1980年にソウル仁寺洞で日本人がコンテナ2箱分の文人石と武人石を購入しているの目にした事だという²⁾。

千信一氏は1943年生、高麗大学校友会会長を務め、スポーツ関係でも活躍する旅行会社の会長である。高麗大学では李明博大統領と同期で学生時代からの交流が深く、影響力も大きいようである。

ここには展示館(屋外)が14あり、第14展示館が「日本から還収した流出文化財の特別展示館」となっている。

★ 石人たちが故郷に帰る日 ★

2001年6月13日、三重県一志(いちし)郡で「在日本韓国文化財返還記念式」が開かれた。日下守氏から世中古石博物館に石像物70点を引き渡す

世中古石博物館



2001.3.28

石人の郷



行事である。崔相龍(チェ・サンリョン)駐日大使は「国際紛争で災いを被った文化財の返還を民間の好意で成し遂げる画期的な出来事である。」と評価した³⁾。この式典には千信一氏も出席していた。

日下守氏は戦後韓国の工芸品を集め始め、石像や青磁の博物館を中部地区に建てるつもりであった。千信一氏は日下と酒を酌み交わしながら、「失われた韓国の財宝を買い求めて本国に送還し、世中古石博物館に陳列するのが使命」と話した。日下は心を動かされ返還に同意する。いくつかは有償で他は無償で寄付した。日下は「娘を嫁にやる様な気持ち」と話したという¹⁾。

四国の在日韓国人男性が収集していた石人像300体を、男性が亡くなった十六年前('85)に名古屋市の不動産などの会社を経営する日下(62)が譲り受けた⁴⁾。日下は三重県白山町で造園緑化会社を経営し、石像200体を無造作に並べた「石人の郷」(www.eonet.ne.jp/~kjn/natsuyasumi.html)を運営していると思われる。

世中古石博物館第14展示館はここから返還された石人像の展示館である。

★ 文化遺産の返還の歴史 ★

日韓交渉の時には文化財の返還は2回行われた。「久保田発言(総督政治のよかつた面は“禿山が緑の山に変った”等)」撤回時に106点、交渉妥結時に454点(陶磁器)と852冊が返還された。フランスはミッテラン大統領が93年訪韓の時、1866年にフランス艦隊が江華島に侵攻して宮廷文庫から持ち去った漢籍6130冊を返還している⁵⁾。

初代総督の寺内正毅は書画1855枚、書物432冊、2000に及ぶ工芸品を集め、現在山口女子大学に寺内コレクションとして保管されているが¹⁾、その内書画134点が慶南大学に寄贈された⁵⁾。

その他東京国立博物館の小倉武之助(半島で大邱電気を創立した実業家)コレクション1100点や東京根津美術館(休館中、港区南青山)、大倉集古館(実業家大倉喜八郎が1917年に創立した日本初の私立美術館。ホテルオークラ本館正面玄関前)などに多くの文化財がある。戦後1948年にマッカーサー元帥が、冷戦が拡大する中、法的・倫理的な理由からではなく、日本人の対米感情を良くしアメリカの政策を成就するために「文化遺産の返還には賛同しない」と述べた¹⁾ことから、現在まで議論されることなく保持されているものである。

最近では靖国神社にあった北関大捷碑(ブッカンデチョッビ)が、2005年10月に韓国に返還され、翌06年3月には北朝鮮に引き渡された。この碑は壬辰倭乱(文禄の役)の時、地元義兵が秀吉軍(加藤清正軍)を破り、その義兵将・鄭文孚の功績をたたえて1709年に咸鏡北道吉州に立てられていた



北関大捷碑



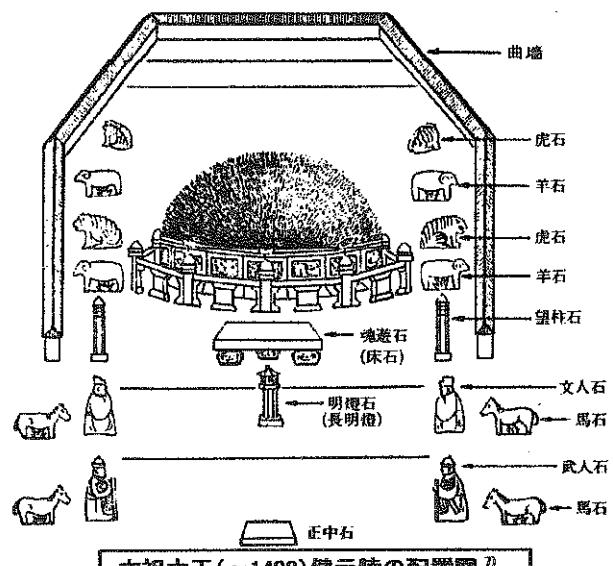
淑容沈氏之墓

ものが、日露戦争の戦利品として1907年に日本に持ち込まれ、碑文の内容に最も場違いな靖国神社にひっそりと保管されていたものである。1970年代に靖国神社に有ることが確認され、盧武鉉政権になって返還運動が具体化し実現したものである。

むくげMLで話題になった東京の高橋是清翁記念公園にあった「淑容沈氏之墓」は、朝鮮朝第九代の王・成宗の側室に当たる女性の墓石があることを元会員の尹達世氏が発見した⁶⁾。2000年6月に墓碑の返還式が行われ2001年春には韓国の方に戻った。今年6月のゲストデイで本人が経緯を熱く語ってくれ、その後ソウル近郊の墓所を本誌に良く登場して戴く足立さんが早速訪ねている。尚、資料7)8)は尹達世氏から本稿の為にお借りしている。

★ 墓における石像の配置⁹⁾¹⁰⁾ ★

文人・武人の石像は墳墓の正面両側に一対ずつ置かれる。王陵の場合は文人と武人の石像が配置され満朝百官の賀礼を受ける形式をとっている。民墓では故人が文人であった場合文人石像を、武人であった場合は武人石像を建てる。死者を守るために「十二神像(十二支の獣面人身像)」とともに墓前に立て、文人は道服用の頭巾をかぶり、笏(しやく 竹:祭祀の式次を記録した文書)を胸の前に

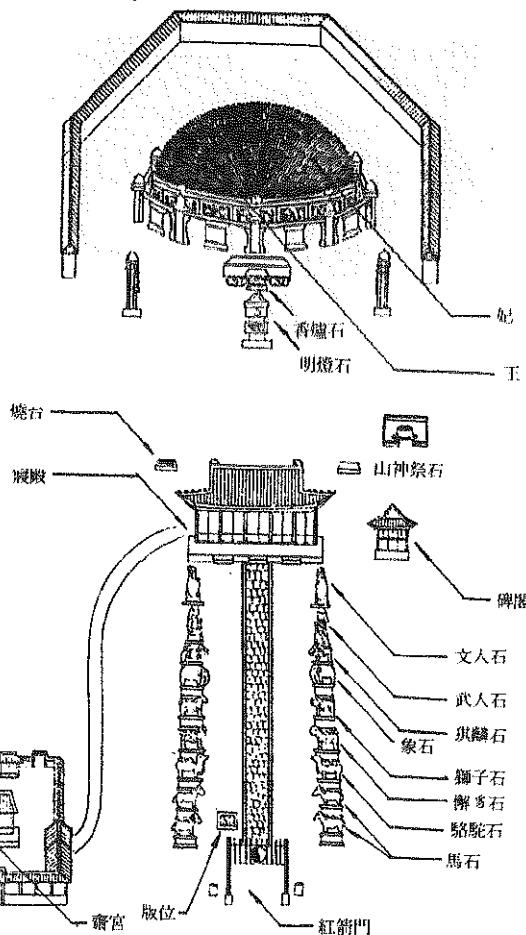
太祖大王(～1408)健元陵の配置図⁷⁾

両手で持ち、武人石像は鎧を着て刀を持って立つ姿だ。中国の影響で八世紀(新羅・聖徳王~736)から王陵に立てられ始め、その配置や彫刻様式は時代により大きく変化している。朝鮮朝太祖と26代王・妃の陵墓の配置図を比較のため載せた。

童子石像は、学問的業績が優秀だが官職に就かなかつた場合や堂下官(正三品以下の昇殿を許さない官職)以下の場合に建てた。従って王陵には設けられず民墓にだけ見られる。これは朝鮮時代の墓地内への石像物の設置制限を厳格に守るためであった。両手を握り頭を垂れて、束ねた房を上げた姿だ。

動物石像は中国後漢の時の手厚く葬る風習にならい墓を守るという意味で獣や四足動物を彫刻し、墓の前や廻りに建てた。王陵では主に獅子像や石羊や石馬を建て、民墓では石羊や石馬が一般的な守護神であった。

望柱石は墓の前方両側に一つずつ建てる石造の柱だ。遠くから墓の所在が解る様に、また靈魂が自分の墓を探す案内役をする。姿は松明を連想させ、柱の中間にはリスの姿が刻まれていて、一方は登り他方は下っている。塔の頭は蓮花の形で、高さは大略2mである。

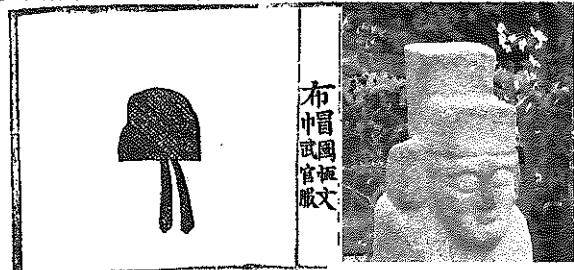


第26代高宗(～1919)明成皇后(～1895)洪陵⁸⁾

★ 文人像の服装 ★

武人像や童子像は見かける数も少なく、その姿はほぼ一様である。一方、文人像は服装が多様に異なり、特にかぶる冠(帽子)には大きく分けて三種類が見受けられる。

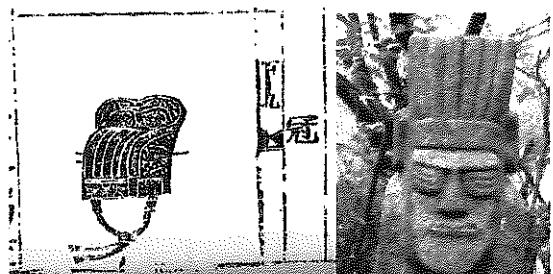
①布帽(ボモ サモ)



国王等が亡くなった時の喪服の冠としてかぶる。粗い布で紗帽(サモ Samo : 100ウォン硬貨の人物がかぶっている帽子)を作り、鉄や角の装飾的な帯(横に張り出した飾り?)から布製の帯に変え前で縛って後ろに垂らした帽子。階段状の格好している。

②冠(カン 叨)

額から上に立ち上がり丸く尾根状で後ろへ

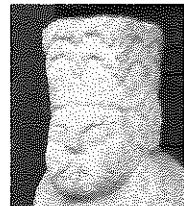


届く筋状の梁(ヤンヤン)がある正装用の冠。

一品は5梁、二品は4梁、三品は3梁、四品から六品は2梁、七品以下は1梁で、動物の角で作ったかんざしで留める。

③名称不詳

この帽子の名前は勉強不足で知らない。前面・側面ともに2波の波模様のある帽子で比較的小型の文人像に多い。ここでは仮に波模様帽と呼ぶ。



★ 実態調査報告書 ★

京都の高麗美術館の公開図書の中に「在日本流出文化財実態調査報告書(京都・東京を中心として)」世中⁹⁾博物館・学術叢書1(2001.6)という本がある。製作協力者だからに日下守氏の名前も記してある。京都の5ヶ所(京都国立博物館、高麗美術館、湯豆腐嵯峨野、友禅美術館、円山公園長樂

苑)、東京の6ヶ所(根津美術館、高橋是清記念公園、祇園寺、調布市郷土博物館、東京国立博物館)の石人像を場所名のみ説明文なしの写真で綴った本である。発行時期はちょうど70体の石人像が返還された時と重なっている。千信一氏を初めとして世中古石博物館関係者が積極的に実態調査していた時期が2000~2001年であるという事であろう。

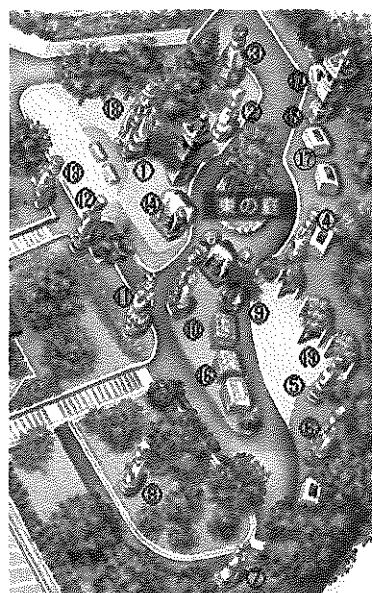
今年6月末に見たこの本に示される11箇所は、この訪問記の有力なガイドブックとなった。順不同で紹介することとする。

☆ 京都国立博物館 ☆

まずお金に関する重要なお話をから。無料観覧日が毎月第2・第4土曜日(平常展示のみ)にあり、石人像が無料で見られたが、工事で今年11月で無料観覧日は一旦終了するそうです。かわりにおまけで12月2日(火)から12月7日(日)の6日間、平常展示は無料だそうですのでそれまでにどうぞ。

南の正門を入って右に行くと朝鮮石像のある東の庭にである。

案内板には「この庭園の石造遺品は李朝時代の貴人たちの墳墓を飾っていたと思われるもので、広く各地から集められたものようである。大正初年、大阪山本家の日



本式庭園の要所に巧みに配置されていたが、昭和50年10月同園の廃滅に際し、石幢2対を柱に利用した亭(ちん)とともに同家(山本あや氏)より一括して当館に寄贈され、その後も数点の遺品が追加して寄贈された」とある。「文官・武官などの石人13軀、石羊2等、石灯籠2基、石造方台(魂遊石)8基など」と博物館よみものNo. 38に書いてあるが、刀を持った武人像は一体もない。又、魂遊石は床石とも言われ高橋是清公園にもあり、床(膳)に祭物や香炉を置く石で表面が平らなのが一般的であるが、ここの物は長さ70cm程で柳行李の様に角が丸く全面に模様が彫ってある(図の⑯)。又⑰は上面に水がたまる様な掘り込みがある。魂遊石を支える足の部分サンタリ(상다리)なのかも知れない。



文人を冠の種類で分類すると、布帽(階段)⑥⑩、冠(縦縞)①③④⑨、波模様帽②⑦⑪⑬となる。階段と縦縞の石像の持つ笏は先が角張っていてあごに付くぐらい大きいが、波模様帽の4体の笏は先が丸く先端は握る手から少しのぞく程度と小さい。四品以上は象牙製、五品以下は木製というルールと関係するのかも知れない。

頭に二つの房がある童子像は⑤⑧⑪の3体。服の裾が短く前後左右靴が露出している。波模様帽の3体も靴が露出しているので、この種類の石人は童子像に近いと思われる。⑭石羊一対、⑮は灯籠⑯は地べたに大きな石を置き四方に小さい石を配置した風水関係の石物と思われる。⑯は休憩所だが、案内板にある「石幢2対を柱に利用した亭(ちん)」に関して、文化日報では文化財の二重受難の例として「先祖の墓の境界を表す望柱石を亭の柱として使っていた。」³⁾と書いている。

四本の転用柱についてはTIME記事¹⁾にも記載があるが、今は赤煉瓦製柱で藤棚が作ってある。

『牧園大建築学科の金晶東教授は「先月18日、京都国立博物館を訪問した際、博物館本館裏の東庭に、朝鮮時代の王陵の石造物が大量放置されているのを見つけた」と語った。金教授によると、石造物は、文人石と武人石など石人13点、石羊2点、石灯2点など、合わせて30点。石造物は散乱しており、そのいくつかは木に覆われて観覧できなかつた。金教授は「庭園の入口の案内には、平然と“植民地時代、朝鮮の王陵から盗掘された石造物”と書かれていた」と語った。金教授は「日本には、数百点の石像が放置されていると見られる」とし「一日も早く、政府レベルで日本全国の石像を調べ、可能なものは返還を求めるべきだ」と話した。』¹¹⁾

「各地から集められた」が「盗掘」と言い換えられているが実態はどうであつたのであろうか。現地で複製復元されていようとも、日本全国の石像を調べ上げ、保存や管理が十分に行われていない場合を手始めに返還することが必要であろう。

★ 早稲田大学構内の石羊と石人像 ★

早稲田大学(西早稲田キャンパス)構内に石羊と石人像が有ることを知り、現物確認と写真撮影に併せて新しい図書館に立ち寄った(08/8/25)。

正門の左の通用門を入り左に道を進むと旧図書館(2号館)の高田早苗記念研究図書館)に至る。入口を守る

様に向かい合って一対の石羊が立っている。1992年の図書館報「ふみくら」には石羊は英国人ゴルドン夫人(早稲田名誉講師~1925)が朝鮮義州で入手、大学に寄贈しゴルドン文庫の「図書」として目録番号まで付いているとのことである。図書館ニュース「薦」によると『2冊だとすると小番号はどちらが(1)なのか。もし利用者から請求があったら出納手がカウンターまで運ぶのか。いや「別置本」の予約が必要かもしれない。館外貸出も出来るのだろうか。それとも重いから「禁帶出」ラベルが貼つてあるのかナーチ探求心のままに尻尾の方に回ってみると2匹ともオスであったという眞實に到達したりするのであるが…。』¹²⁾と
私と同じ事をするのかと苦笑した。早稲田

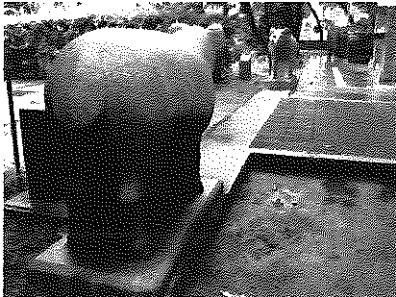
ウイークリーによると高さ82cm、全長130cm、幅48cmだそうだ。

仏教もキリスト教も元は一つ(仏基一元)であることを実証しようとしていたゴルドン夫

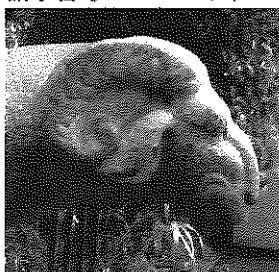
人は、石羊の角はユダヤ教で贖罪の日に吹くショファー(角笛)と同一であるといい、“古代宗教の東アジア伝播のあかし”である見、大限重信も“これは消すことのできない石に刻まれた証拠である”と語ったとか。

88年の「ふみくら」では2対4体の石人像と望柱石1基があり、「薦」に詳しいとある。しかし現場には石人像が見あたらない。代わりに小さい石像4体と説明版があった。

「童子石・文人石とは祖先の墓の前に立てられ、墓を見守る石像のことをいう。ところがこのような文化財は盗難にあい、海外の博物館や民家の庭を飾るだけのものとなってしまった。自国の文化財が海外へ流出したことを歎く思っていた千信一高麗大学校校友会長(世中古石像博物館の創設者)



請求番号モ4・519(1)?



は国内はもとより、海外所在の文化財を回収するため尽力してきた。その結果、2001年7月、日本所在の70点あまりの文化財が韓国に戻った。このたび、早稲田大学は創立125周年を記念して、千信一氏から①「童子石」②「文人石」③「Poksu」④「濟州童子像」の寄贈を受けた。①②は25号館手前に設置、③④は2号館脇に設置。2007年10月21日】

冒頭の70体返還記事が説明版に刻まれ、高麗大と早稲田は協定校である事をあわせて考えると、千信一氏と日下守氏と早稲田の関係が密接なことが解る。③「Poksu(法首)」は「朝鮮中期(16世紀)作 村やお寺の里程標」、④「濟州童子像」は「朝鮮後期(19世紀初~中期)作濟州島の墓に建てられていた男の子を象った石像。」と説明が有る。

2対4体の石人像については『A氏は「石羊」と同じくゴルドン文庫の「蔵書」ではないかと言う。また、これを「孔子像」と呼ぶB氏からは中国大陸からの「略奪品」説まで飛び出した。』¹³⁾

『さてその「真相」であるが、半分だけは何とか明らかになったことをご報告しよう。柴田光彦氏に直接執筆をお願いしたものである。――

今回の石人は東洋美術陳列室所蔵のものです。(中略)同室の「昭和拾七年以後早稲田大学東洋

『會津八一氏蒐集品目録』の百番 美術史研究会会津八一氏蒐集品目録の<100番>にあたります。同目録の終わりには「朝鮮李朝石人

二個は重量の関係上動かすことを得ず。恩賜記念館表玄関の入口の両側に陳列し置けり」とあります。代価は75円、唐犬俑や羊俑、鶴俑が各3円であるのを見ると、かなり高価であったことがわかります。前室長で名譽教授の小杉一男先生にお尋ねしたところ、都電の終点の先、面影橋の近くにあった骨董屋で求められたものであるとのことでした。

会津記念室は移りましたが、(中略)図書館近くの今場所に移して、そのまま現在にいたったものです。ところで前回の50号掲載の石人(筆者注:縦縞帽4梁の写真)は、今回の中よりも大きいものですが、残念ながら今日までその伝来と所属を確かめることができませんでした。昔のことを知っている長老の先生方に尋ねて見ましたが、どなたもご存知ありません。昭和48年の調査の書上げの記録には見あたりません。あるいは大限邸のどこかにあったものかも知れませんが、大学史編集所保管の古い写真にも一寸見あたらないと報告がありました。といつ

て決して中国大陸からの略奪品ではありません。石人、石羊の類は元は朝鮮の貴族の墓域にあったものです。日本の石像や石灯籠のように今でも造られているそうです。未確認のことが略奪品になってしまっては困ります。(1984.1.26／柴田光彦)』¹⁴⁾と、説明版とは違った石像の話が展開している。

☆ 前の石人像はどこに？ ☆

「会津八一氏蒐集品目録」の<100番>は写真の通り波模様帽の2体です。この写真の撮影日は2003年3月11日で場所は2号館付近です¹⁵⁾。今回私が訪ねた場所ですが、もう有りませんでした。

縦縞帽4梁を含む大型の2体も有りません。25号館前には違った4体がありました。以前の石人像は世中古石博物館へ返還されたのであろうか。



25号館前の①「童子石」②「文人石」

☆ 調布祇園寺と郷土博物館の石人像 ☆

新宿から小田急線で調布の一つ手前・布田駅でおり、北へ約15分歩くと野川を越えてすぐに虎豹山祇園寺がある。グーグル・ストリートビューで予習していくと分かりやすい。

この寺には2体の文人像がある。板垣退助が植えた「自由の松」で有名な寺である。寺の住職に由来を尋ねると、「戦前か戦中に付近の山にあった4体をこの寺に運んだと聞いている。2体は市立郷土博物館に移した。」とのこと。

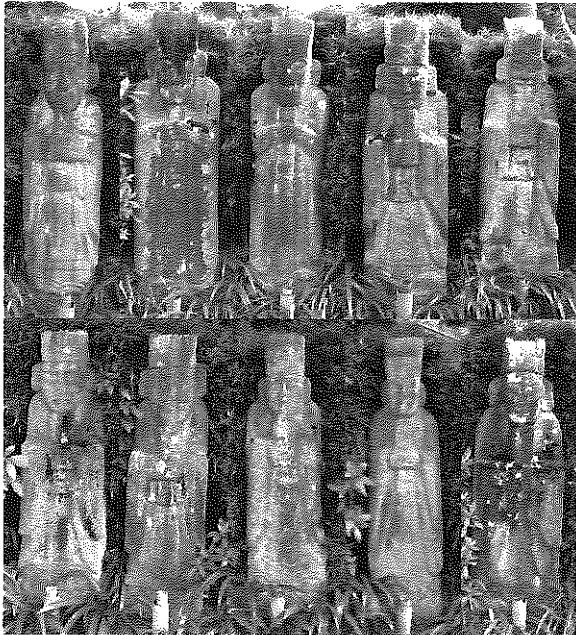
引き続き2駅先の調布市立郷土博物館に向かった。年配の館員に由来を聞くと「昭和49年にこの博物館はできた。そのとき祇園寺から2体移設した。調布一体は昔は別荘地帯で



銀行や企業の保養所がたくさんあった。祇園寺の住職から以前聞いた話だが、「付近の山」という所は今、北部公民館のある場所で池貝鉄工の別荘があった場所だ。そこで装飾用に置かれていた物であろうとのことだった。」という。4体が2体ずつに別れた事情は判明したが、最初の4体をいかにして入手・所有したのかは不明のままである。

☆ 京都ゆどうふ嵯峨野 ☆

早稲田行の都電と同じような路面電車の嵐電(京福電鉄)で嵯峨野へ。終点嵐山駅で降り、青や枯れた蓮口が混在する美しい池を見ながら天龍寺に向かう道を西進。御影石の道しるべに従って左に折れると広い敷地の湯どうふ嵯峨野に着く。その南西の道路脇に生け垣を背に12



体が整然と並んでいる。写真是間を縮めているが、右上から左下へ高さ195cmから130cmと背の順に並んでいる。

店の人に由来を聞いてみた。「確かに当店の物であり、先代オーナーが市中で購入したのは聞いているが詳しいことはわからない。先代オーナーはもともと大阪の人だが購入場所も不明。4~5年前に韓国の博物館関係者が偶然に立ち寄った際に本物であることを確認している。」とのことである。世中博物館の人ですかと問うと、名刺を持っている店長が不在で解らないとのことであった。

TIME¹⁴⁾記事に『京都国立博物館から10キロ離れたところには、豆腐レストランの入り口に通じる道に沿って、朝鮮文人像の花崗岩の彫像が並んでいる。

博物館館長の Jang(筆者注:世中古石博物館長)は、訪れた2年前(2000年か)、おのののの彫像の前に、食堂が日本の旗を供えていることに気付いた。彼は激怒した。「本当のことを言えば、私は彼等を殺したかった。」彼は言う。「第一に奪ったことは悪い事だ。しかし、使い方を間違うと、それは無礼に当たる。」(レストランはもう旗を並べていない)』とあり、年数とやりとりの内容は違うが同じ事を言っているのでは無いかと思う。訪れたときには竹の輪切りの花生けが立ててあった。

この店は嵯峨野の雰囲気作りにつとめ、大八車の車輪が壁に数個、中国風の羅漢が約50体、すでに広島呉市の博物館へ寄贈されたと石碑があるが人間魚雷・回天10型を展示した事があつたりと屋外展示に気を遣つて居る。この店の湯豆腐は次の機会までお預けとし、ゲストディヘと急いだ。

☆ おわりに ☆

前掲の実態調査報告書の11ヶ所を含め、現在つかんでいる石人像の所在と数をまとめたのが下表である。不明な所は空欄や?印にしているので、計は合わない。すでに訪問した所やこれから訪問する所を順次レポートしていく予定である。

ここで見たあそこにもあったという情報をお寄せ下さい、石人像情報をより充実したものにしていきたいと考えております。
(続く)

<参考資料>

- 1) 米国TIME誌 2002/2/4 号 Donald Macintyre 記者
- 2) 西部トラベル 韓国情報 2000/9/30
- 3) 韓国文化日報 2001/6/16 オ・スンフン記者
- 4) 伊勢新聞 2001/6/14
- 5) 半月城通信 www.han.org/a/half-moon/
- 6) 民団新聞 1999/11/03
- 7) 朝鮮干陵石仏誌(上篇)殷光俊・編著 嶺南文化社
1985/9/30
- 8) " (下篇)殷光俊・編著 民俗苑 1992/12/30
- 9) www.21fengshui.com/content3/view.html
- 10) www.nfm.go.kr:8080/japanese/open/iframe_stauas.htm#top
- 11) 中央日報 2002/11/14
- 12) 早稲田大学図書館ニュース「萬」49号 (1983.10.29)
- 13) " 「萬」50号 (1984.1.20)
- 14) " 「萬」51号 (1984.3.30)
- 15) 早稲田大学HP 今日のキャンパス点描
- 16) 日本で韓国石像探そう!
mixi.jp/view_bbs.pl?id=26761814&comm_id=1236532

2008.9.23現在の調査結果

場所	石像分類 帽子分類	文人			武人	童子	計	羊	備考 (ネット上の検索や参考16)による)
		階段	縦縞	波					
山口・岩国	岩国紅葉谷公園						?		
兵庫・芦屋	芦屋個人邸			1			1		
兵庫・芦屋	俵美術館	2					2		新造品か
兵庫・神戸	白鶴美術館忠魂碑			1			1		
兵庫・神戸	白鶴美術館下マンション	1					1		新造品か。顔は嚴ついが笏を持っている。
兵庫・神戸	舞子靈園						1		武蔵家(カネボウ)の墓
兵庫・西宮	樋之池町古美術商			1			1		
兵庫・西宮	目神山個人邸	3					3		新造品か
兵庫・西宮	神呪寺山門前	2					2		「兵庫の中の朝鮮」(いつ、誰が不明)
兵庫・西宮	旧八木邸マンション	1					1		2体有った内の1体
兵庫・姫路	元祖広畑 南大门						1		ガラス戸の中
京都・八坂	長樂苑	2				1	3		
京都・北区	高麗美術館	6	7	0	4	1	18	2	望柱石2、墓碑2、濟州島?、ヘテ2
京都・嵯峨野	ゆどうふ嵯峨野	4	8				12		
京都・下京	古代灰枕苑			6			6		残り3体は個人邸保管
京都・上京	京都上京区千本通五辻通					1	1		
京都・東山	京都国立博物館	2	4	4	3	13	2		灯籠2、方台8
京都	京都大学農棟の某家元事務所						4		門の中
大阪・今里	韓国物産会社	4					4		新造品か
大阪・羽曳野	野中寺(やちゅうじ)	1					1		大阪府羽曳野市野々上5-9-24
大阪・箕面	箕面西小付近						1		
岐阜・大垣	大垣藩校敷教堂跡			1			1		
愛知・瀬戸	愛知県陶磁資料館(長久手)	3		2		1	6		岐阜県大垣市東外側町2 愛知県瀬戸市南山口町234
愛知・名古屋	鈴巣師(なたやくし)		2				2		名古屋市千種区鈴音町
愛知・名古屋	徳川美術館 業務部						2		名古屋市東区徳川町1017
愛知・名古屋	小さな割烹屋さん						1		名古屋市今池
愛知・名古屋	日本家屋の料亭			1			1		名古屋市上飯田
三重・鳥羽	ホテルの玄関	2					2		
三重・白山町	石人の郷						200		(300-70)で200以上と思われる
神奈川・横浜	JR桜木町周辺		2				2		
神奈川	R16沿い		1				1		
東京・上野	東京国立博物館		1				1	2	
東京・調布	抵觸寺		2				2		
東京・調布	調布市博物館		2				2		
東京・南青山	東京根津美術館						?		
東京・高田馬場	早稲田大学		2			2	4	2	
東京・青山	高橋是清公園	1	3	1			5		魂遊石、望柱石、灯籠、方台他
東京・南麻布	有栖川宮記念公園						?		
千葉・印西	印西市						1		千葉県印西市
千葉	民家の隅っこ		1				1		千葉県
山形・最上郡	戸沢村		2		2		4		韓国から輸入(全12体540万円)高麗館に設置
	計	24	49	16	6	9	315	8	